再掲載

出典：「育てる」通巻第167号　昭和57（1982）年5月25日発行

特集　共働きと子どもの教育

今号は「働くお母さん」がまだ少なかった昭和50年代に、ワーキングマザーの先駆けとも呼ぶべきお母さんたちが感じていたこと、そんなお母さんを見て子どもたちが感じていたことを取材した特集の再掲載です。時代を感じる部分もありますが、大きな「気づき」があることと思います。

お勤めに行っているお母さん

［子］水谷　由紀（小学六年）

「ママただいま」と言えば「おかえりなさい」という返事が返ってきます。幼稚園から帰ってくる私はいつも、玄関からろうかへ、お母さんにむかって走っていきます。そして両手をひろげているお母さんにとびついてだっこしてもらいました。私が小学校に入学した時、他のお母さんは勤めに行く人もいました。でも私のお母さんは勤めにいかないで、教室をひらき、いろいろな人にピアノを教えました。そして私がかぜなどで学校をやすんだ時はおかゆをつくったりしてめんどうを見てくれました。又、お母さんは私のからだに

あった服をつくってくれました。四年の二がっきの12月からお母さんは勤めにでることになりました。私は反対しました。だって帰ってきた時おかあさんが「おかえりなさい」をいってくれないなんてとてもさびしいからです。それでもお母さんは勤めにいきました。でもお勤めにいくいそがしい朝、せかせかとしているお母さんは、とてもいきいきしていました。

五年生のはじめ社会科で田うえをしました。そしてかりとりをして、だっこくをしました。とうとうみんなでカレーライスをたべることになりました。

私のお母さんは、いそがしいのに学級委員をひき受けていました。だからつかれているのにかい物をして材料をそろえました。当日お母さんは仕事のつごうでカレーライスの会には来ませんでした。

他の子はお母さんが来てはしゃいでいたのでとてもさびしかったけどつかれていてもかい物にいったお母さんはりっぱだと思います。私はもう六年生になったのだし、大きくなるまでお母さんは勤めにでなかったのだから、これからはお母さんの大事な時を私にかまわず大切にすごしてほしいと思います。

人として生きる

［母］水谷　紀美子

山奥でひっそりと咲いた百合の花にも、海底深く生活している小さな貝にも、その生物だけが持つ、独自の世界があります。すべての生物は、同じように、太陽の恵みを受け大自然の中での調和の中に生きています。

リンドバーグ著『海からの贈物』の中に、「貝は、自分の身体から分泌物を出して、いろいろな模様や色、形をつくる」と書かれています。貝なんて、感情もなく、海の底でひっそりと、考えることもしないで暮らしているなんていう想像は、あたっていないかも知れません。何故なら、一つとして同じ色や形の貝はないし、貝がらの形や、模様は、自己主張ということになりますから。

人間も、自分の気持ちに合った、自分の世界を周囲につくります。つくるにあたっては、種々の選択をし、つくり上げた世界が自分の生活しやすいものとなるよう努力します。それは、生きるということにつながる

と思います。単に、社会的に安定しているとか、経済的に安定しているとかの基準をこえて、自分の心の安定をつかもうとするのです。だからそれは、生きがいの問題ともいえます。女性が社会にでて仕事を持つということは、利益や効果を目標とした行為というよりは、もっと純粋な目標とか効果をはなれた行為だと思います。

それともう一つ、人間には、自己の内部に、ひそんでいる可能性を発揮して、社会にそれを役立たせたい欲求、又、自己の可能性をのばしていきたいという気持ち（自己実現への欲求）があります。

この二つのことから、女性がある時期に家庭、育児から社会へと目を移すことは当然のことと考えられます。男性が父親であり社会人であるのと同様に、女性は母親であると同時に社会人たるべきだと思います。女性は母親としての立場だけで生きていて、いいのだろうか、と考えます。女性が母親として生きていくのは大切なことだけれど、一人の人としての人生を考えた時、やはり、それはその人の一面だと思います。

家にいてほしい、と子どもは考えるかも知れません。また夫は、家庭にいて、家庭を守ってくれさえしたらそれでいい、と言うかも知れません。でも、いろいろな貝のある様に、いろいろな考えの人がいます。自分の世界はこの家庭の中だけで充分と考えるなら、それでいいけれど、限られた時間しか持たない人間である以上、生命を燃焼するような生き方だって一つの生き方だと思います。自分が選んだ仕事と家庭との両立、子どもの教育との両立に懸命にとりくんでいる母親の姿を見て、子どもが非行に走るとは私には思えないのです。ただ、幼児期には、母親が家庭にいることが望ましいとも思います。その数年間の母親の温かいぬくもりは、子どもの一生に多大な何かを与えると思います。

人は人として、生きるのが一番良いと最近は考えます。女としてとか、母親としてとか、子どもとしてとか、父親として生きるというより、一人の人間として生きるということは、それぞれの立場として生きるということをつつみこむことだと思います。

子どもにも「お母さんは、あなたの為に一生を生きてきた」というよりも「お母さんは、生きたいように

生きてきたから、あなたも自分のすきなように生きてごらん。たった一度の人生なんだもの。」といってあげた方がいいのではないかと思います。自分の一生を大切に生きることは、他人の一生をも大切に生きることになります。子どもは、幼児期をすぎたら、子どもと見ると同時に人と見ることができるし、子どもも母親を一人の人間としても見ることができれば、人生について語り合うこともできるでしょう。年齢の差こそあれ、子どもも母親も人生を歩いていく人間同士、結局は、人間と人間のつき合いなのですから。

共働きの家庭から

［母］岸野　洋子

我が家には小学四年、中学二年の二人の娘がいます。年が四年もちがうのに、姉の方が妹をおいかけて「キャア、キャア」さわぎ、いつもにぎやかな家庭です。

昨年私は半年間、労働大学に通いました。昼は勤め（月に十五日勤務）、そして夜は学校と、今考えてみて、この年になって自分自身「よく通ったな」と思います。その影にはやはり家族の協力がありました。

仕事に行く前には、夕食の仕度、そして子どもたちには手紙を書いておきます。すると子どもたちは二人で食卓へ準備をし、姉は妹のめんどうをみ、そして妹は姉のいうことを聞くようです（私がいるときは、いつも喧嘩ばかりしていのに）。そして「お母さんは昼は働いて夜は学校にいっているのだから大変だ」といって台所もかたづけてくれます。

妹の方は、私が家にいる時は、いつも言われないとなかなか本もひろげないのに、私がいないと勉強したり、九時になれば寝るようです。姉の方は私が帰るまで

起きて待っていてくれます。

そして十二月十日、私はやっとの思いで卒業証書を手にすることができました。その時、この卒業証書を少しでも早く子どもたちにみせたいと思いました。「この卒業証書をもらうことができたのはあなたたち二人のおかげよ、ありがとう」と、大声で叫びたいくらいでした。

二人の子どもは自分のことのように「お母さん、よかったね」と喜んでくれました。「子どもは親の姿を見て育つ」と言われますが、私はこの時ばかり、それを感じたことはありません。親が誠心誠意、真剣に打ち込んでいるものがあれば、それはきっと子どもたちにも通じていくのではないでしょうか。

この半年間、特に下の娘は朝一時間位のふれあいであった日が何日もあったはずです。ほんとうに寂しかったでしょうが、それほど寂しそうな素振りも見せず明るくふるまっていました。そして「お母さん、卒業できるかな、頑張っていかなくちゃだめだよ。」なんて、逆に私を励ましてくれます。すると自分の方が、胸をしめつけられる思いで、「よし、子どもたちのためにも、どうしても卒業しなければ」と思って、私の足は、学校へ向かいました。

母親は、あんなにも大変な苦しい思いをして、子どもを産んで育てます。子どもたちに歩くことや話すこと、着物のきかた、ご飯の食べかたからはじめて、必要ないっさいのことを教えます。母親が子どもたちに対する最初の教育者です。そして、幼い時、母親からおそわったことは、一生忘れられないものだと思います。私の記憶に一番長く残っているのは、母から聞かされた話や、母の模範です。母親からうけた印象は、人間の性格や習慣を形づくるうえに重要な影響をおよぼすのではないでしょうか。

もともと、悪い子の種があるわけではありません。人間は生まれるときには、みんな同じく、よい人間になる素質を持っていて、よい影響を受けるか、悪い影響を受けるかによって、良い子、悪い子とにわけられるのではないでしょうか。

自分は働くことをきらい、勉強することもいやがり、利己主義的に行動しながら、子どもだけには、りっぱな人になれと要求しても無理なことです。ことばより

も実践的な模範が先立たなければと思います。そして、私たち母親が精一杯生きることではないでしょうか。そうすれば、子どもの非行という心配もなくなっていくのではないかと思います。

共働きの家庭から

［子］岸野　明子（小学四年）

私のお母さんは、月に十五日仕事にいっています。お母さんがいないときは、おねえちゃんといっしょにいる。でも、おねえちゃんといてもつまらない。おねえちゃんが遊んでくれないからだ。

お母さんは、休みのときは、よく遊んでくれる。

お母さんのいやなところは、何回も同じことを注意することだ。

お母さんは、「仕事をよくやるから、えらいなあ」と思う。

お父さんは、日曜日でも仕事をしたり、よるおそくまでかいぎがあったりします。

でも、仕事がないときは、遊んでくれたり、どこかに遊びにつれていってくれる。

家の仕事はあまりやらない。

お父さんのいやなところは、よく酒をのむことだ。夜、おそくまで仕事をしたり、酒をのみすぎたりして、びょう気にならなければいいと思う。

［子］岸野　実穂（中学二年）

うちは、父も母も働いている。父はいつも生活が不規則になってしまい、母は月に十五日ぐらい仕事にいくが、仕事がない日でも何かしらあるので、月に十日ぐらいしか家にいない。私は私で、月曜日から土曜日までは、クラブがあるので、家に帰るのが六時近くになるし、月・水・金曜日は、七時から九時まで塾がある。だから、ふつうの人より、親といる時間が短いと思う。

こういう共働きの家庭の子は非行に走る割合が高いといわれているそうだが、私は、そうは思わない。中学生にもなって親がいなくてさびしいから悪い仲間の中に入るなんて考えられないし、親から見はなされているなんて思うほど甘ったれている人も少ないと思う。それに母だって働く権利はあるのだから、子どもが足をひっぱるのはいけない。そういうようなことがあるから、日本の女の人はいまだに男の人に圧倒されているのだと思う。

むしろ、「女の人は家にいるものだ」と考えている親をもつ子どもの方が問題だと思う。親が言うことは、ふつうの子ならだいたい信じるから、親がそんな考え方をしていれば、必ず子どももそういう考え方をするようになってくる。これでは、非行に走らなかったとしても、人間的にいけないと思う。

だから、母親も仕事にでるべきだと思う。家にばかりいて子どもを甘やかすと、かえって非行に走りやすい。子どもも、母の立場や家の状態を考えて、いつまでも母親にたよらないようにしなくてはいけない。こういうことが実現するには、やはり、親が考え方を誤らないようにしてほしいと思う。

気をつけていること

［母］柏谷　チヅル

私には三人の息子（中学一年、小学二年、三才）がいるが、子どもが病気の時以外は、共働きということをあまり意識せずに今日まできた。子どもの教育は、一般の家庭でも共働きの家庭でも、本質的には変わりはない。ただ、共働きの場合は、昼間子どもとの接触がないので、その時間をどうとり返すか、短い接触時間をいかに有効なものにするか、どうすれば子どもに親が働いていることを理解させるのかだと考える。

家庭は血のつながった人間の集団であり、切っても切れない人間同士の集まりである。その中で、父、母、兄、姉、弟、妹というそれぞれの立場があり、親は子どもの肉体を養うだけでなく、心を育てるという大切な仕事がある。これが、家庭の中心的な機能である。その家庭における大切な仕事の基本は、親の愛と保護である。親の愛は無条件の奉仕であり、「心のふるさと」となる根源でもある。

家庭がその機能を十分発揮するためには、くつろげる場であり、緊張を少なくする場でなくてはいけない。ホッとした救いの気持ちの味わえる場にしなくてはいけない。そのためには、家庭の一人一人を無条件で迎えられる温かいふんい気が必要である。家庭という空間において、家族が共に楽しく遊び話し合う場をもち、子どもが親といっしょにいることが、とても嬉しいという心のやすらぎの場を作ることが、子どもの情緒の安定に大切な要素である。子どもの心の安定は、子どもを大きく成長させるのにもとても大切と思う。温かいふんい気の家庭であってこそ、子どもの教育がしっかりしたものになる。

いろいろならべたてる理屈からではなく、親の日常生活の中から子どもは、自然や人間、諸々の文化に対する価値観やしつけなどを学びとっていく。ただ、そこで親として気をつけなくてはいけないことは、子どもに対する愛情の表現の仕方である。子どもに対する接し方、態度一つで、子どもは不安にもなり、緊張も増すものである。

私は、子どもが小さいころは、教師という目で我が子を見ていた。子どもは萎縮してしまった。その時、

主人は、「きみは家でまで教師である必要はない」と私に言った。私の心にずしりとくるものがあった。母親としての自分を反省した。教師という立場での子どもに対する接し方、言葉使い、態度は、母親のそれとはおのずと違いがある。それに気づかなかった自分が情けなくもあった。

まず私は、今までより三十分早く朝起きれるようにした。自分が仕事に行くあわただしさのしわよせを子どもに与えたくないと思ったからだ。食事に時間を持たせるようにした。「早くしなさい」をやめた。「お母さんは、○時までに家を出ないと遅刻するの。遅刻はしたくないのよ」などと、子どもに私のことを少しでいいからわかってもらえるようにとそれとなく話をしていった。すると、それまでぐずぐずしていた子が自分なりに時間を考えて行動するようになった。

私は、「いってらっしゃーい」と大きな声で、道の曲がり角まで見送った。子どもは、嬉しそうに、二、三度ふり返り、学校へ行く。以前は見送りさえしなかったんだと自分を反省した。

子どもを見送るとすぐ、玄関に手紙をおいた。内容は「おかえり」と「遊びに気をつけて」という簡単なもので、そばにおやつも置いた。手紙の返事は、二、三回しか返ってこなかったが、朝、忙しくてつい忘れてしまった時など「今日はどうして手紙がなかったの」とそっと言いにきた。ああ、返事はないけどちゃんと読んで心にとめていてくれると思い、返事がなくても続けた。子どもに対する短い言葉の一つ一つを考えながら使っていると、大人にとっては何でもない言葉であっても、子どもにとっては大きな喜びにも悲しみにもなることを改めて感じ、言葉を選ぶことの大切さもわかった。

仕事を持っていると子どもと接する時間が短い。以前は質より量と考えていたが、子どもが大きくなるにつれて質も量も大切ということを身にしみて感じるようになった。

私が家に帰ると、待ってましたとばかりに子どもたちが友だちのこと遊びのこと学校のことなど話してくれる。疲れと忙しさでいいかげんな聞き方をすると、もう話さなくなる。だから、よほどの急用でない限り、子どもが話をはじめたら腰をおちつけて聞く場を

つくる。

子どもの話題の中から、友だちの大切さ、物ごとに対する価値観、礼儀作法など、折にふれ話をする。すると子どもも素直にうなずいている。

温かく楽しい家庭があることが子どもの教育には何より大切と思っている。学校では教師としてよき指導者でありたいし、家庭においては「よき母親」でありたいと思いながら毎日を送っている。

働く母へ

［子］柏谷　久俊

うちの母は、教師をしている。母の帰りは、いつもだいたい五時すぎだ。土曜日は一時半すぎでお昼ごはんは、作っておいてある。冷えているごはんは、うまくもなんともない。

お母さんが家にいる人は、いいな。ごはんは、つくりたてだし家に帰れば「お帰り」と気持ちよく言ってくれる。母がいない時の寂しさは、母が家にいる人には、たぶんわからないと思う。ことばでは、言いあらわしにくい。

けれどうちの母は、働いていても、僕たちのことを考えてなるべく早く帰ってきてくれる。でも、いくら早く帰ってくるからと言っても、土曜日のことを考えると、働かないで家にいてほしいと思う。しかし、母が家にいても、あまり仕事はないので、やはり働いている方がよいとも思う。

そして母は自分でも「働きたい」と、いっているので、若いうちに、いっしょうけんめい働いてほしいと思う。母は、働くことに生きがいを持っている。働いている時の母は生き生きしている。

なぜ働くことに生きがいを持っているのか、なぜ働きたいのかは、ぼくにはまだよくわからない。でも、働きたいという母の気持ちは大切にしてあげたいと思う。

だから、ぼくたちのことは、あまり心配しないで一生懸命働いてほしいと思う。

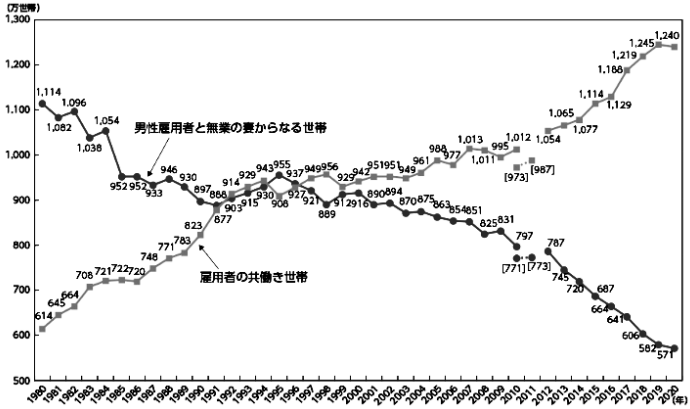
再掲載を受けて――

共働き

武市　正幸（育てる会　東京本部）

「共働き」というテーマを聞いた時、「これって死語じゃないか？」と思ってしまった。昭和が終わり、平成を越えて令和に入っている。二十一世紀も二十年が過ぎた。しかし国の統計情報「令和３年版厚生労働白書」には１９８０年から２０２０年までの「共働き等世帯数の年次推移」というデータが公表されており、共働きという言葉がまだ生きていることが示されていた。

共働きとは一般的に、ともに就業している夫婦のあり方を指すようだが、前出の白書によれば、掲載記事が刊行された１９８２年は男性雇用者と無業の妻からなる世帯は１０９６万世帯であるのに対し、雇用者の共働き世帯は６６４万世帯と、いわゆる専業主婦世帯が大きく上回っている。しかし、１９９０年代を境にこれらが逆転している。直近の２０２０年のデータを見ると、男性雇用者と無業の妻からなる世帯は５７１万世帯と



共働き等世帯数の年次推移
（「令和３年版厚生労働白書」第２部より）

ほぼ半減し、雇用者の共働き世帯は１２４０万世帯とほぼ倍増しているのである。逆転が始まった１９９０年代といえば、男女雇用機会均等法が施行された数年後にあたる。これらデータから見ても私が死語と思ってしまっても已むを得まいと得心した。

再掲載記事から四十年。果たして記事に書かれているような事柄が良くも悪くも変化してきたかというと、私の感じる限り何も変わっていないような気がする。ここに日本の社会構造の問題があると思う。

たしかに産前産後休業制度に加えて、育児休業制度が法制化され、昨今では男性の育児休業取得が奨励されるようになったが、とは言え前出白書によると２０１９年のデータとして雇用者のうち女性は83％取得しているのに対して男性は７％強ととても均等とは言えない状況である。結局のところ家庭内のオペレーション（家事・育児・教育・地域社会との関係構築等）が女性側に偏る構図は変わっていないような気がする。さらに言えば、現政権の閣僚の男女比を見ても問題の根っこがどこらあたりにありそうか、わかるというものである。

さて、子どもの教育面である。

再掲載記事中、共働きと子どもの非行化というテーマが何か所か出てくるが、現在目にすると唐突の感が否めない。しかし、これも当時を知る方ならわかるだろうが、ちょうどテレビドラマで金八先生が始まり、積み木くずしなどが放映され、家庭内の青少年問題がクローズアップされていた時である。そういった時代背景と道徳観、家庭観が相まって「共働きの家庭の子は非行に走る割合が高い」と流布されたのだろう。それがその通りであれば、単純には言えないだろうが当時より共働き世帯は倍増しているのだから、その家庭の子の非行化も比例することになり、大きな社会問題になっているであろうが、少なくても私は耳にしたことはない。

振り返って我が家はどうかといえば「共働き」である。子どもは二人いる（すでに成人している）が、どちらも非行化していない。保育園の頃は「さびしい」と発するどころか正月二日目にして「もう保育園に行きたい！」と言っていた。この時得られたことは「人は群れの中で育つ生き物である」ということだ。我が子たちは実によき群れに出会い、育ち育てられたと思うところである。これは今でもぶれずに私の教育観の一つである。